



大阪毎日新聞社の映画事業をめぐる映像メディア産業の本流と傍流 : 寺田清四郎商店と伴野文三郎商店

福島, 可奈子

(Citation)

国際文化学, 32:131-154

(Issue Date)

2019-03-25

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81010651>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010651>



大阪毎日新聞社の映画事業をめぐる映像メディア産業の本 流と傍流—寺田清四郎商店と伴野文三郎商店—

The mainstream and the side stream of the film industry
over the movie business of the Osaka Mainichi
Newspaper Company —The dealer Seishiro Terada &Co.
and the trader Bunzaburo Banno &Co. —

福島 可奈子

FUKUSHIMA Kanako

Summary

As one of historical fundamental research on today's problems of audiovisual media, we will take up the dealer Seishiro Terada &Co. and the trader Bunzaburo Banno &Co. who were involved in the movie business of the Osaka Mainichi Newspaper Company, and discuss the role that they played as a mainstream and a side stream of the film industry in Osaka before the Second World War.

The Osaka Mainichi Newspaper which is a long established company of visual media organized "Motion pictures group" for its promotional activities since the late Meiji era when the cinematograph was born. Therefore, although the movie business has been mentioned several times in previous research, little is known about the actual sales situation of Terada &Co. which supported its technical aspects from the beginning. Terada &Co. had been selling the magic lantern in the red-light district in Osaka city before.

Regarding Banno & Co. which sold the small gauge film "Pathé Baby" (9.5 mm) made in France, the amateur movie culture and its works were mainly discussed only, but about entry into the educational movie business of the Osaka Mainichi Newspaper from the early Showa era and its actual condition were hardly discussed. For that reason, in this paper, we will clarify a part of the film industry in Osaka by tracing the sales battle of the contrasting two companies and its transition.

キーワード

大毎活動写真班、寺田清四郎商店、伴野文三郎商店、広告映画、教育映画

I はじめに

現在わたしたちが当然のごとく無料で閲覧している民放テレビ局や、Facebook または Twitter などの SNS 企業がその広告収入で主に運営されていることは広く知られている。しかし明治末期の大阪にマスメディアの映像広告代理店があったことは、今ではほとんど忘れられてしまっている。そのため本稿ではまず、大阪の巨大新聞社である大阪毎日新聞の傘下で明治末期に関西初の映像分野の広告代理店となった寺田清四郎商店を取り上げる。大阪毎日新聞社の映画事業については、これまで幾度も先行研究で言及されてきたものの、そのほとんどが文部省や大阪毎日新聞社が主導した「映画教育」運動としての側面とその流れを、行政や大新聞社側の文献資料から再考するものであり、その運動の映像技術的かつ産業的側面を当初から中心的に支え続けた大阪の大手映像機器製造・販売業者であった寺田清四郎商店に注目した研究は管見の限り見当たらない¹⁾。しかし「教育」という看板を掲げていても、現在のような義務教育体制下ではなかった当時の「映画教育」事業は、民間の大小様々な「映画娯楽」産業のまさに延長線上にあったし、またすでに明治末期から映画産業として巨大化していった劇場公開用の映画製作・配給事業などに比べれば、昭和期に入っても大小の個人商店が乱立する状況にあった。そのため筆者は、当時の大阪毎日新聞社の映画教育運動の実態を知るためには、見落とされがちであるものの必要不可欠な産業的側面の一端を、その本流として中心的役割を担った寺田清四郎商店の事業戦略から見ていく。

一方、伴野文三郎商店については、小型映画研究分野ではフランス製の小型映画「パテ・ベビー (Pathé Baby、当時は「パテーベビー」と呼ばれた)」をはじめて日本に輸入し、中心的に販売した業者としてよく知られている。しかし先行研究では、パテ・ベビーとそのフィルムサイズ「9.5 ミリ (当時の呼び方では「9 ミリ半」)」がもたらしたアマチュア映画文化と作品論に主たる関心が置かれており、大阪毎日新聞社の教育映画事業への参入とその実情についてはほとんど語られることがなかった²⁾。その最たる理由としてはおそらく、この事業が大阪支店を中心におこなわれたこともあり、先行研究が主として参照してきた東京支店発行のアマチュア・シネアスト向けのパテ・ベビー雑誌『ベビーシネマ』や『パテーシネ』ではあまり言及されることがなかったためであろう。また日本における「小型映画」事業の開拓者として大成功したアマチュア映画事業に比べ、映画教育事業は後発かつ結果的に失敗したという側面もあるだろう。特にこの映画教育事業においては、伴野文三郎商店以外の業者は「35 ミリ」か「16 ミリ」映画を提供しており、伴野の「9 ミリ半」はあくまでも傍流であった。しかし、だからこそ筆者は、大阪毎日新聞社の映画教育事業に参入した様々な業者 (例えば、他には深田商会、北山活映商会、岡本洋行、小西六本店など) の中から伴野文三郎商店を取り上げ、この日本最初の「アマチュア映画」の覇者の知られざる部分に光を当てたいと考える。

また市政主導で映画教育を推進した東京に対して、大阪は大阪毎日新聞社とその傘下の中小業者を中心に民間で発展していくため、大阪の個人商店の足跡を追うことこそ大阪の映画教育事業の実態解明には重要である。特に大阪毎日新聞社が映画教育事業を開始した

昭和初期は、商工業都市・大阪が関東大震災で壊滅した東京の人口を抜いて日本一の大都市「大大阪」になった時期でもあるため、国家的な映画教育事業の解明にとっても大阪での動向を看過することはできない。ゆえに本稿では、1908(明治41)年から大阪毎日新聞社の映画宣伝と学校教育事業をバックアップした本流である幻燈・活動写真商(35ミリ、16ミリ映画)の寺田清四郎商店と、1928(昭和3)年から大阪毎日新聞社の学校教育事業に乗り出した傍流であるパテ・ベビー商(9ミリ半映画)の伴野文三郎商店の商戦とその変遷を辿る。それによって戦前のお阪の映像メディア産業の中で最も対照的な二社が、明治から昭和10年代までの時代の波にどう立ち向かい、また翻弄されたのかを当時の一次史料を用いて明らかにする。それにより現在にも通じる映像メディアの抱える様々な問題、テレビ・SNSの動画配信事業とYoutuber(個人動画発信者)の、さらにスポンサーや広告代理店、許認可権を握る政官界との関係など、現在我々が直面している問題に対する史的プロトタイプ研究のひとつとしたい。

II 錦影絵の伝統と寺田清四郎商店——幻燈から活動写真製作へ

明治期のお阪で幼少期を過ごした、のちの朝日新聞記者の篠崎昌美の回想録には次のような一節がある。

大阪西区新町通りの寺田洋楽器店の陳列窓はいつも沢山の幻灯器が並べてあって、最低のものでも一台二円、スライドは一枚十銭もしたので、庶民の子供の手にはおえず富豪のぼんぼんの娯楽用であった。この寺田屋の横丁に吉川写真館があって、その表部屋ではいつも数人の画工がせっせとスライドに絵をかいていたのがよく見えた³⁾

まだ創業間もない明治中期の寺田清四郎商店(以下「寺田商店」と略す)の様子が、その前を通りかかった庶民の子供の目線でありありと描写されている。江戸時代の風情が残る商家の町並みのなかに、幻燈に洋楽器に写真といった文明開化の賜物が溶け込む和洋折衷な明治のお阪の情景である。

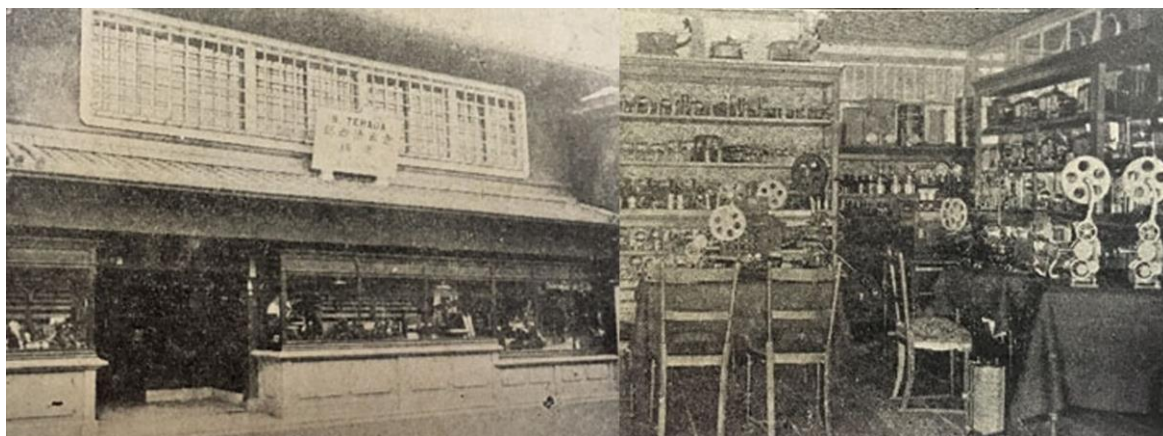


図1 寺田商店の店舗外観と内部(『幻燈器械 幻燈映画 目録』明治末頃発行より)

1887(明治20)年、播州揖保郡上余部出身の初代寺田清四郎は、大阪市西区新町通2丁目に幻燈機やガラスライドの製作販売店を開業した⁴⁾。当初、江戸期から続く大衆芸能である幻燈芝居「錦影絵」の風呂(木製幻燈機)やスライドを作り、島之内大宝寺町、船場御霊神社境内、堀江遊郭(のちの落語席賑江亭)などの専用常設小屋に一座(富士川派、玉川派、奈尾春派など)を呼んで興行を打つとともに、当時全国で大流行していた「通俗教育」のための西洋幻燈(金属製幻燈機)やそのスライドも製作・販売した⁵⁾。「通俗教育」は1885(明治18)年に文部省主導ではじまり、当初は就学率が低い児童の状況を改善するために、その父兄に対して学校教育の意義を通俗的に説くことを目的としたが、次第に児童だけでなく父兄や近隣住民に学問知識や道徳、最新ニュースなどを視覚的に啓蒙する、いわゆる「社会教育」へと流行が変化していく⁶⁾。その際、スライドの原画製作者として、その後日本画壇の重鎮となる菅楯彦もかかわった⁷⁾。菅がまだ無名の画家だった18歳の頃、病床の父に代わって家計を支えるための内職で、日清戦争の最新ニュースのスライドを描いていたという。その回想によれば、

私が書いたのは日清戦争のころで黄海の海戦や九連城の占領などだった。新聞号外が出ると幻灯屋が駆け込んできて、その想像をよくかかされたもんや。ときにはつぎの戦勝を勝手に予想しておかんと、いざ戦勝となったときの間に合わぬので、よくあてすっぱなものを書きましたナ。なにせ遠い外国の地のこってすさかいに見たこともないし、参考書というものもおまへん。真物(ほんまもん)が新聞紙に絵で出よるたんびに冷汗をかいたもんだっせ⁸⁾。

当時のスライド原画は絵を用いたものがほとんどで、実際の写真が幻燈に登場してくるようになるのは日露戦争以降のことである⁹⁾。つまり当時は最新ニュースさえ想像の域を出ておらず、庶民は一種の娯楽的メディアを通して世界を認識していたといえよう。

また寺田商店がある新町通2丁目は「大阪四花街」のひとつである新町遊郭に囲まれ、長堀川を挟んだ対岸には堀江遊郭があり、当時の大阪の繁華街の中心地であった四ツ橋にもほど近い場所である¹⁰⁾。新町遊郭の堀沿いの桜並木は夜桜見物の名所で、鯨料理の有名店を含む商家が軒を連ねており、遊女屋に出入りする男性客だけではなく、女性や子供も集まる繁華街でもあった。また松島遊郭では遊女屋のまわりにならくり人形芝居や文楽座があり、芸能こそが遊郭の呼び物になっていた¹¹⁾。寺田商店の錦影絵も、堀江遊郭内で老若男女を含む庶民向け興行をおこなっていたが、その一方で、おそらく遊女屋や芸者置屋を利用する得意客向けに「座敷影絵」と呼ばれるお座敷芸も提供していたと思われる。座敷影絵の内容には、卑猥な笑いを生む一種の春画(「わ印」)が含まれ、お座敷に芸妓や遊女などを呼んで一夜を盛り上げる芸能のひとつである¹²⁾。つまり寺田商店は、興行、座敷、富裕家庭などあらゆる販売層にアクセスが可能な「芸能」「娯楽」を製作販売するための場所として新町遊郭内を選んだのであり、それは江戸期からの芸能と花街との密接な関係からなる文化を前提としている。東京浅草にある吉原遊郭と比較してみると、吉原遊郭が浅草寺

の仲見世や映画街(6区)から少し離れたところに位置し、入口は大門ひとつだけの閉鎖空間であったのに対し、大阪の新町遊郭界隈は比較的開放的な空間であり、明治政府の監視と影響力が強い東京に比べて、大阪は依然として江戸期の遊興の雰囲気色が濃く残っていた。また技術的な面からみても、江戸期に眼鏡レンズを木製幻燈に転用して製造・販売していた眼鏡屋が、明治・大正期に入って金属製幻燈になっても引き続き製造・販売をしており(堀眼鏡店、上村重兵衛など)、江戸時代以来の商売形態が明治期に入っても連綿と続いていたのである。

その一方で寺田商店は機を見るに敏で、活動写真が大流行するようになるとすぐに、活動写真機の輸入製作販売、西洋楽器と蓄音機の輸入製作、スポーツ用品製作卸売などに事業を拡張し、1906(明治39)年には店舗を拡張した。ここで明治末頃と考えられる寺田清四郎商店発行『幻燈器械 幻燈映画 目録』を参照してみると、以下の60タイトルの活動写真フィルム(35ミリ)が販売されている¹³⁾。

表1 寺田商店の35ミリフィルム販売リスト(『幻燈器械 幻燈映画 目録』より)

No.	タイトル	尺(長さ)	価格	No.	タイトル	尺(長さ)	価格
1	二百三高地の苦戦と赤十字社の働き	365	100円12銭	31	首継ぎ足継ぎの奇術	100	28円
2	南山大撃戦遂に我軍の占領	310	86円60銭	32	俘虜兵寝台の夢	58	16円24銭
3	東鷄冠北砲台撃戦及同爆発占領	150	42円	33	餓鬼踊りと椅子踊りの大奇術	140	39円20銭
4	奉天付近雪中進撃の大会戦	100	28円	34	象の戯曲	120	33円60銭
5	沙河大会戦と林盛堡占領	165	46円20銭	35	元禄美人の舞姿	129	36円12銭
6	旅順攻囲軍山岡軍使勸降書を齎す	58	16円40銭	36	美人揃ひの鬼子遊戯	98	27円54銭
7	鉄道破壊と露軍の総退却(遼陽)	100	28円	37	動物園の動物	180	50円10銭
8	ペトロパブロフスク旗艦の轟沈	110	30円80銭	38	自転車盗賊夜景真想	225	63円
9	旅順港大海戦	150	42円	39	笑ぬ者は懸賞	230	64円40銭
10	我歩兵の夜襲 敵將刺殺 敵兵俘虜	80	22円40銭	40	学生花運動	138	38円64銭
11	鴨緑江我軍の苦戦渡河戦	100	28円	41	一寸法師の写真写し滑稽	100	28円
12	遼陽付近の撃戦	120	33円60銭	42	印度大象の水遊	120	33円60銭
13	鉄条網と鹿柴の苦戦	120	33円60銭	43	賢犬の活動と百笑	255	71円40銭
14	黄金山砲台に敵將我砲弾に斃る	80	22円40銭	44	トランプの奇術—美人真想	120	33円60銭
15	金州城門破壊と其接戦	93	26円4銭	45	アイスクリンヲ食して大奇術	100	28円
16	軍事探偵の衝突	59	16円52銭	46	農事改良実地施行の光景	500	140円
17	クロバトキン遼陽停車場着況	100	28円	47	ワインの滝と大噴水光景	125	35円
18	露兵進軍と地雷火破裂	60	16円80銭	48	アルプス山中と汽車旅行	135	38円70銭
19	バイカル湖畔露兵の進軍	140	39円20銭	49	浪花四美人の磯節の舞	148	41円44銭
20	露軍軍用軽気球使用失墜の実況(火、青着色)	184	51円52銭	50	大阪住吉神社と公園の光景	300	84円
21	蚕の変化洋美人と蝶の舞(青色着色)	106	29円68銭	51	勇活泰西美人の舞踏	90	25円20銭
22	ロンドン市大劇場大火災の惨状	166	46円48銭	52	噴火山の惨状	112	31円36銭
23	滑稽網打魚釣り喧嘩	90	25円20銭	53	支那人犬の奇襲	154	43円12銭
24	浪花美人戦勝踊り	134	37円52銭	54	自転車曲乗	250	70円
25	西洋大奇術不思議の相撲	72	20円16銭	55	空中飛行の奇術	128	35円84銭
26	播州舞子の浜(列車進行中撮影)	208	58円24銭	56	子供の遊	60	16円80銭
27	大面の早替滑稽	36	10円8銭	57	浪花名著の芦辺踊(名妓数十名)	600	168円
28	大阪道頓堀の光景	57	60円96銭	58	日本軍隊生活	300	84円
29	紳士怒って写真師を呑む	62	17円36銭	59	不思議の石膏	300	84円

これを見ると、日露戦争を中心とした軍事ニュース、西洋の喜劇やトリック映画などがある一方、大阪の芸妓による踊り「浪花美人戦勝踊り」「浪花四美人の磯節の舞」「浪花名著の芦辺踊(名妓数十名)」や大阪の風景「大阪道頓堀の光景」「大阪住吉神社と公園の光景」といった地元に特化した内容もあり、寺田商店が他社などから既成フィルムを手に入れる傍ら、自社でカメラマンを雇って地元の芸能文化や風景をつぶさに記録していたことがうかがえる。フィルムの長さは58~600尺(フィート)まであり、「一尺に付金廿八銭」で販売されている¹⁴⁾。また「尺数ノ義ハ右の通一定致居候得共貴需ニ依リ幾尺にても可差上候」とあり、希望の長さにカットして販売するサービスもしていた。当時の映写機はサイズによって装填可能なフィルム尺の許容範囲が異なっており、顧客所有の映写機に合わせて販

売する必要があったのである。それでも当時寺田商店が販売していた映写機は、幻燈との兼用機で45～200円もする高額なもので、さらに光源には取り扱いの危険なアセチリン瓦斯発生器などを使用する必要があったため、表向きは専門の映写技師をつけることができる程度の潤沢な資金がある興行師や団体が主な販売先であった¹⁵⁾。しかし『読売新聞』に掲載の「活動やの打明話」によれば、当時一般の富裕層の宴会等で映画を出張上映する「お座敷活動」（「機械フィルム、説明者等を全部くるんで一晩何円也と請負」う）という裏商売もあり、「こいつ仲々馬鹿に出来ない金額」になっていたという¹⁶⁾。

そのような環境下で、寺田商店から映写機と映写技師の提供を受けて「映像メディア」に進出し、その後強い影響力を発揮していくのが、1888（明治21）年創刊の大阪毎日新聞である。

III 大阪毎日新聞社活動写真班における寺田清四郎商店の活動——「宣伝」上映と製作

1908（明治41）年、大阪毎日新聞社（以下「大毎」と略す）は9000号発行記念事業の一環で、自社新聞宣伝活動を目的として「活動写真班」創設と地方巡回を発案した。その際、寺田商店から「アーバン式映写機」を一台購入している。「アーバン式映写機」とは、イギリスで活躍したチャールズ・アーバン（Charles Urban、1867～1942）が開発したタイプの映写機である。この映写機は投影レンズの前にプロペラシャッターがあるのが特徴で、しばしば日本製の模造品が製作された。寺田商店の販売品をみると、「活動大写真機械」（200円）として売り出されたのがまさにアーバン式である¹⁷⁾。この映写機は「瓦斯ライトの手廻はし」で初心者には映写機操作が難しい上に、大型の瓦斯発生器は爆発の危険性があるため、映写機の運搬や操作に人員を3～4名つける必要があった¹⁸⁾。活動写真班ではこの映写機が、1921（大正10）年の夏に初輸入された自動式のデブライ映写機（光源は電球）が岡本洋行から購入されるまで用いられることとなる¹⁹⁾。

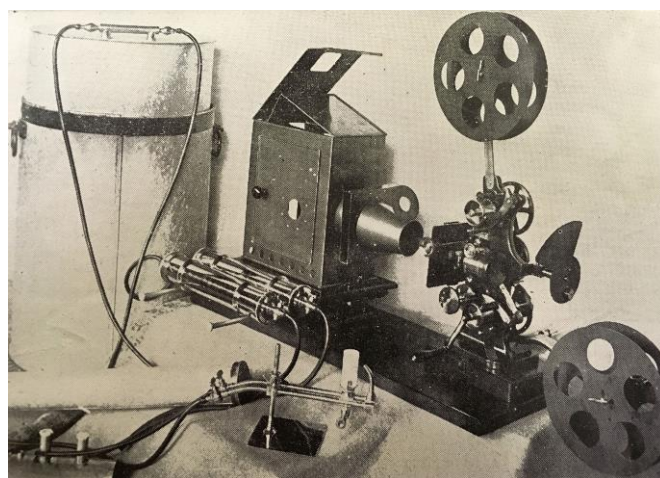


図2 寺田商店販売のアーバン式「活動大写真機械」（『幻燈器械 幻燈映画 目録』より）

活動写真班による第一回「活動写真大会」は、1908（明治41）年9月2～9日（5～6日

は休み)毎夜7時から、大阪府の浜寺公会堂において催された。浜寺公会堂は、1908(明治41)年に日本最古の国立公園である浜寺公園(1873(明治6)年開園)に南海鉄道が建てた洋館で、演説会や演奏会などに適した設備をそなえた約600人の収容が可能な施設である²⁰⁾。それに先立つ1903(明治36)年、大阪毎日新聞は南海鉄道と共同で同公園内に海水浴場を開設しており、同公会堂で行われた「活動写真大会」は、海水浴客向けに新聞の販売拡張を目的としたものであった²¹⁾。

この第一回大会では、寺田商店囑託の映写技師・小林梅吉が「二百尺から三百尺内外」(当時の映写機の平均回転速度16コマ/1秒で映写して3〜5分程度)の以下のフィルム5本を上映している。

- 実写『吉野山の桜』220尺
- 実写『宮島名所巡り』
- 滑稽『三十六面相』
- 実写『東京大角力(梅ヶ谷常睦山の取組)』356尺
- 滑稽『看板広告屋の失敗』345尺

これらは「殆ど全部実写ものと云つてよい位で、劇といつても「劇的」な実写といつた方が妥当な程幼稚な滑稽もの道化もので、さうしたものは皆外来品」であった²²⁾。例えば『三十六面相』は「壺人の紳士滑稽種々の顔に変化」する西洋の滑稽もので、『看板広告屋の失敗』も同様の喜劇であるが、なぜこれらのような「娯楽本位の映画」が選ばれたかといえは「直接目的は販売拡張にあつて読者慰安の娯楽に依つて紙数の拡張を計つた」からである²³⁾。しかし表向きはあくまでも「新聞社としての権威を考慮」して「通俗教育」を掲げていた²⁴⁾。またフィルムの出处については、「活動写真班創設の当初フィルムは寺田商店若くは横田、吉津両商会(引用者註:吉澤商会の誤植か?)から購入したもので、一卷四五百尺の実写と千尺以内の外国の滑稽のものが殆んど全部であり、「それ等は盗写もののみで従つてよいものは皆無と云つてもよい位だったし値段も存外安かつた」というが、寺田商店の盗写(無断複製)問題に関しては、1924(大正13)年に朝日新聞社の囑託で皇太子御成婚を撮影したフリーカメラマン友成用三が、同商店店員に酒で酔いつぶされた隙に自身が撮影した貴重なフィルムを無断コピーされて売り捌かれたことを吐露しており、このような方法を当初から常習的におこなうことで安く賄っていたことがうかがえる²⁵⁾。また活動写真班への価格は「一尺十五銭及至二十銭位」で購入するか、「一尺一日損料一厘五毛位」で借入するかどちらかであったというから、同時期に寺田商店で一般向けに「一尺に付金廿八銭」で広告していたのと比べると、実際は三割引から半額の価格で販売されていたことになる²⁶⁾。

こうして寺田商店は、大毎が映像メディアに進出するにあたり、映写機やフィルムなどの機材の格安提供、映写技師やカメラマンなどの人材派遣といった映像に関する全ての面で大毎をバックアップしたが、同1908(明治41)年のうちに「商売人の技師を雇つておくことは色々な点から不便」として解雇され、その結果大毎社員の中から映写技師を育成することとなった²⁷⁾。そのため、早々に活動写真班の上映にかかわらなくなった寺田商店であ

ったが、翌年からは「広告映画」製作という形で提携していく²⁸⁾。「広告映画」とは、現在でいうところの「宣伝(コマーシャル)」である。活動写真班の巡業当初はフィルムを掛け替える合間に「広告幻燈」(宣伝のためのスライド、静止画)を映していたが、1909(明治42)年から「広告映画」を上映すべく寺田商店に製作を依頼した。依頼を受けて寺田商店が製作したのは『大阪名所』(全三巻)で、丹平商会(現丹平製菓)、山崎兄弟商会(現山崎帝国堂)、森下仁丹、信天堂山田安民薬房(現ロート製薬)、三越など大阪の有名企業の広告映画を合わせたものである。宣伝回数150回以上の契約をした企業の広告映画製作費は大毎側が持ち、1回100尺につき2円の上映広告料を徴収した。この方法によって大毎は、費用が嵩む(本編の)映画フィルム購入費や班員の宿泊費などと相殺しようと試みたに過ぎなかったが、結果は予想以上にスポンサーが集まり、一時は一夜の収入が広告映画5〜6本上映して35〜40円にも達し、思わぬ利益を上げたのである²⁹⁾。このように大毎が「活動写真」という最新の映像メディアへ進出し、十分な営業実績を上げることは、地元で有力かつ老舗の映像専門業者である寺田商店の存在なしでは成し得なかっただろう。このとき大毎が「活動写真」に求めたのは、その娯楽性による集客力と(自社新聞などの)宣伝効果であったし、「活動写真」を提供する寺田商店は大毎という大手新聞社の広告代理店となることで、まさに潤沢な資本と民間の権威を獲得したのであるが、その後、大毎と寺田の両社はさらに大きな国家規模の事業に加担していくことになる。

IV 大毎フィルム・ライブラリーとテラダ映画製作部——35ミリの「社会教育」映画から16ミリの「学校教育」映画へ

1911(明治44)年、幸徳秋水ら社会主義者によるとされたいわゆる「大逆事件」を機に、文部省は天皇制国家に反対する思想を撲滅するために、出版物、展覧会、幻燈、活動写真、講演会等における通俗教育の改善を唱えはじめた。活動写真においては、まず興行用映画とその映画館を風紀・教育上の観点から問題視するようになり(通俗教育調査委員会の設置)、1921(大正10)年には、活動写真を規制して取り締まるよりも、むしろ教育上優良な映画を作り、環境を整えることで積極的に教育側へ取り込もうとする動きが出て来た(文部省の推選映画運動)。そのような国家的な方向性のなかで大毎の活動写真班は、1920(大正9)年に国家事業に関与する機会を得る。それは、国勢院の委託で日本初の国勢調査の趣旨と方法を宣伝する映画を全国で巡回上映することであった。また1917(大正6)年から、その後のニュース映画の先駆けとなる「フィルム通信」を始め、これを期に「東宮の御渡欧」「仮屋沖に於ける潜水艦の沈没」「関東地方の大震災」など国民の関心を集める歴史的な大事件を取り扱うようになった。こうして、かつての「娯楽本位」から次第に「報道及社会教化を目的とする実用本位」な「思想善導の映画劇を中心として科学的趣味を啓発する実写もの、新聞記事を映画化したニュースもの、風刺漫画等」の製作・上映をすることで、国家の意向に沿った「社会教育」(かつての通俗教育)としての側面を意識するようになる³⁰⁾。

そして1919(大正8)年頃になると、アメリカのデブライ社製の携帯用映写機が発売されて一気に映写機の軽量・簡易化が進んだ。またこの映写機は携帯しやすいだけでなく、

光源もそれまでの重くて危険な瓦斯発生器を用いずに、当時すでに都市部には普及していた電灯を使用することができたため、安全かつ大変便利であった。そのため、1921(大正10)年大毎の活動写真班も長年使用していた手回しの大型アーバン映写機(寺田商店から購入)からモーター式の携帯用デブライ映写機(岡本洋行から購入)に交換した。つまり、この頃から携帯・簡易化が進んだことで価格もより安価になり、映写技師でない素人、例えば小中学校の教職員でも簡単に扱えるようになったのである。

当初この映写機は東京の岡本洋行だけが取り扱っていたが、1924(大正13)年になると、大阪の奥商会(大阪市北区宗是町十番地)が関西代理店として販売を始める。奥商会は、岸和田市中央尋常高等小学校の訓導であった奥三代松がはじめた学校向け教育映画専門の業者である。当小学校の訓導であった時分、奥は「学校児童の之等常設館行きを禁止する一方に、各学校で毎月一回教育映画を児童に見せ、之を毎月の講演会に利用して聴衆の増加を計」りたいといち早く考え、市役所に相談へ行くものの予算がつかず、私費で立て替えて岡本洋行から販売されたばかりのデブライ映写機を購入して計画を実行した³¹⁾。その後、一般向きの社会教育や児童向きの学校教育のための活動写真上映会を次々に企画して実績を上げ、小学校を退職後に奥商会を立ち上げた。しかし教員あがりの商売は「ブローカーには騙される、使用人には持ち逃げされる、良い鴨が飛び込んで来たかと思ふて有頂天になると、大詐欺にひっかかる、故に最初の三年五年は赤字の連続」だったというが、その後大毎が大々的に「学校教育」の事業に参入したことで、その経営は一気に好転することになる³²⁾。

1927(昭和2)年大毎は、事業部副部長兼映画班主事の水野新幸(1890~1956)が中心となり、自社倉庫に眠る約3000本の所蔵フィルムを活用するために「大毎フィルム・ライブラリー」を設置し、翌年にはその運用のために「全日本活映教育研究会」と「大毎フィルム・ライブラリー学校巡回映画連盟」を発足した³³⁾。全日本活映教育研究会は、映画による「学校及び社会教育の実際問題の研究と実行」を目的に教育者を中心に結成されもので、当研究会の経営・指導の下で、長年大毎が購入あるいは撮影してきたニュースや社会教育用フィルムを利用して学校で「毎月一回または隔月一回に定期的に映写会を開く」ために組織されたのが、大毎フィルム・ライブラリー学校巡回映画連盟(以下「学校巡回映画連盟」と略す)である³⁴⁾。当連盟は開始から2年で全国の加盟校が512校にもものぼっており、その頃にはフィルムや映写機を貸し出す出入り業者も増え、関西圏では寺田商店、奥商会、深田商会、伴野商店大阪支店、北山活映商会など、関東圏では岡本洋行、小西六本店、高密工場、アクメ商会など多岐にわたっており、全国的な一大事業だったことがうかがえる。

そのなかで大毎と最も付き合いの長い寺田商店は、1922(大正11)年になって二代目寺田清四郎に代替わりすると、さらに映写機開発などを推進した。それまで活動写真班の常用映写機だった自社製品に取って代わられたデブライに対抗するように、国産初の携帯用「ビクトリー」映写機を開発して「舶来品に比し価額約三分の一」(380円)で販売した³⁵⁾。二代目寺田清四郎は、従来から問題視されていたフィルムの引火が引き起こす火事の危険性にも着目し、1929(昭和4)年にはフィルムが燃えにくい携帯用映写機「ノビリー」を開発・発売している。ノビリーが燃えにくい理由は「後部シャッター式で尚コンデンサー前方に雲母板があるため」で、このシャッターは映写光線を自動で遮断する仕組みになっ

ており、実用新案(第4918号、昭和5年)を取得している³⁶⁾。また1931(昭和6)年には、大毎本社内にてフィルム燃焼実験をおこなったが、その際岡本洋行輸入の「デブライ」やアクメ商会輸入の「アクメ」、高密工場製作の「ローヤル」や高木商店製作の「セイミツ」が3～11秒程度で引火しているなかで、「ノビリー」のみ1分余引火しなかったため、寺田商店はその点を大々的に広告してその成果を広くアピールした³⁷⁾。

また寺田商店は「テラダ映画製作部」を立ち上げ、多数の「教育映画」を製作する。ここでいう「教育映画」とは、1920年代後半から1930年代にかけて大量に製作された「映画館外で上映される、教訓もしくは宣伝用の劇映画」と「現実の事象が、素朴に再現・伝達」された「実写映画」(ドキュメンタリー)を指す³⁸⁾。監督には楠山律や竹内俊一などプロの商業映画監督を迎え、撮影は店主の清四郎から家業を受け継いだ寺田清彦が担当した。テラダ映画製作部が最も得意としたのが「情操映画」と呼ばれる道徳的な感情を養うための教化映画で、一般大衆向けの社会教育用から児童向けの学校教育用まで幅広く製作した。それら作品はしばしば大毎発行の雑誌『映画教育』にも取り上げられ、学校巡回映画としても採用されている。例えば『岐路』(1931[昭和6]年、竹内俊一監督、寺田清彦撮影)は、同年3月に大阪学校巡回映画連盟の学校巡回映画プログラムのひとつとして選ばれ、レコード伴奏付きで上映された。この作品は、スピード時代に取り残された人力車夫の善さんが、食うに困って家主の畑の芋を盗むが、罪を詫びて許されるという人情美談を描いた情操的な「社会教訓」映画である³⁹⁾。他にも同時期に「学校教育」の『天与の生命』、「農村振興・青年教訓」の『真情の輝き』、「母性愛・訓庭」の『木綿針と草履』(楠山律監督、寺田清彦撮影)、「純情美談・児童情操」の『蒼空』(佐々木和郎監督、寺田清彦撮影)などを製作し、これが後に国家総動員体制下の「文化映画」へ発展していく⁴⁰⁾。当時これらの作品はスタンダードサイズ(35ミリ)で製作したが、1930年頃になると家庭、学校、社会教育の映画会など様々な場で映写機の16ミリ化が進んだため、16ミリの縮写版も販売するようになった⁴¹⁾。また同時に映写機「ノビリー」の16ミリ用も手回し式75円、モーター式120円で発売し、大毎の学校巡回映画連盟に採用された⁴²⁾。つまり大阪では、府や市が率先して映画教育を推進していたわけではなく、むしろ各学校の教育者や大毎フィルム・ライブラリーのような民間機関が中心となって一大事業へと成長していくが、この傾向は「市当局の力が映画教育の方面にも働いてある」東京とむしろ正反対であり、東京の市政主導の「まづ調査研究」に対して大阪は商売として「まづ実行」であるために、結果として大きな波及効果を生んだのである⁴³⁾。その背景には、東京と大阪の市民性や都市機能の違いの問題以上に、1923(大正12)年9月の関東大震災の影響があるだろう。この震災で壊滅状態となった東京から、工業都市の大阪へ多くの人々が職を求めて移り住み、1925(大正14)年には日本一の大都市、いわゆる「大大阪」へと成長し、人材・資金共に最も潤沢な時期であった。

このように映画が小型化するなかで、大毎も従来のスタンダードサイズ(35ミリ)だけでなく、16ミリ、9ミリ半といった小型映画を積極的に取り入れていくようになるが、そのなかで連携を強めていくのが16ミリ映画を取り扱う深田商会である。深田商会は、16ミリ規格を開発したアメリカのコダック社が1926(大正15)年に日本支社「日本シネ・コダック・サービス社」を設立した際、劇場公開用(35ミリ)映画をコダスコープ(16ミ

リ)用に縮尺した「コダスコープ・ライブラリー」の貸出業務を委託された。小型映画は1923(大正12)年頃から富裕家庭向けのホーム・シアターやホーム・ムービーを中心に大流行していたが、当初アマチュア向けには16ミリよりも、機材・材料費が安価で、撮影から現像までの一切を自分で出来る、フランスのパテ・シネマ社の9ミリ半サイズ「パテ・ベビー」の方が圧倒的に人気だった⁴⁴⁾。このパテ・ベビーをフランスから輸入して日本総代理店をつとめたのが、次章で言及する伴野文三郎商店(以下、「伴野商店」を略す)である。伴野商店はアマチュア向け事業では都市部を中心に全国で大成功をおさめるものの、関西圏を中心とした教育映画事業では大苦戦を強いられることになるのである。

V 伴野文三郎商店大阪支店の教育映画事業参入——「教材映画」としてのパテ・ベビー

1923(大正12)年の関東大震災直前、パテ・ベビーの映写機を日本に輸入したのは、パリで化粧品や貴金属・雑貨等の貿易商を営んでいた伴野文三郎である。パリの一等地(オペラ座界限)に本店を持つ伴野商店は、日本でのパテ・ベビー輸入販売に勝算があるとみるや、翌年に東京と大阪に支店を置き、東京支店支配人を大伴喜祐、大阪支店支配人を大橋善次郎がつとめた。当初は家庭やアマチュアの娯楽用としてホーム・シアターやホーム・ムービーを売りにして大人気を博したパテ・ベビーであったが、大毎が学校巡回映画連盟を発足して雑誌『映画教育』を刊行し始めた1928(昭和3)年頃から、教育映画の分野へも進出した。この頃各地でアマチュア倶楽部が作られるなどしてパテ・ベビーの愛好家はすでに全国で4万人近くいたが、「従来とかくアマチュアの道楽か子供のおもちや程度に一般から考へられてゐる傾向」を打破するために、学校向けの「教材映画」の製作・販売をはじめることとなる⁴⁵⁾。伴野商店が唱える「教材映画」とは、授業中に教科書の補佐となる「動く掛図」として視覚的に児童に教授する「学術教育」を目的としており、それまで寺田商店が製作してきたような児童の道徳心を養う「情操教育」用のものとは一線を画していた⁴⁶⁾。大毎の教育映画事業の争奪戦は『映画教育』のなかでもしばしば繰り広げられ、伴野商店の大伴喜祐は「教育映画といへば情操、宣伝の範囲を脱せずこれが製作にのみ腐心してゐるのはあまりに国民教育に冷淡にして、児童に対して不親切不人情といはなければなりません」と、大毎との関係性で「宣伝映画」「情操映画」を主に製作してきた寺田商店の営業方針を痛烈に批判している⁴⁷⁾。大伴が老舗の寺田を相手にこのような強気な姿勢を打ち出すことができたのは、ひとえに先進国フランスで製作された大量の「教材映画」を輸入販売することができるという自負からであろう。なぜなら、パテ・ベビーは本国フランスでは当初家庭教育および学校教育用として大量の「教材映画」を販売しており、日本でのパテ・ベビー販売の独占権を持つ伴野商店は、その転用が容易だったのである。そのため、その年から翌年にかけてフランスから数百種の教材映画を輸入して日本語タイトルに差し替えはじめたが、1929年10月発行の『教材映画としてのパターベビー』に収録された「パターベビー教材用映画目録」に掲載された第一回提供分が以下である⁴⁸⁾。

表2 伴野商店の9ミリ半販売リスト(『教材映画としてのパターベビー』より)

No.	タイトル	サイズ	巻数	ジャンル	日本版No.	フランス版No.	家庭向け販売
1	秩父宮殿下御成婚儀	大缶	1	皇室	23		
2	昭和御大礼の盛儀(前編)	大缶	1	皇室	27		
3	昭和御大礼の盛儀(後編)	大缶	1	皇室	27		
4	昭和御大礼大親兵式の実況	大缶	1	皇室	29		
5	昭和御大礼大親艦式の実況	大缶	1	皇室	31		
6	着御及奉迎の巻	大缶	1	皇室	167		
7	御親閲式親兵式の巻	大缶	1	皇室	169		
8	鍋かぶり日親(第1編)	特大缶	1	宗教	17		有
9	鍋かぶり日親(第2編)	特大缶	1	宗教	17		
10	トロール漁の壮観	大缶	1	紀行風俗	33		
11	南朝鮮	大缶	1	紀行風俗	35		
12	金剛山の奇勝(京城付き)	大缶	1	紀行風俗	37		
13	鴨緑江(新義州、平壤付き)	大缶	1	紀行風俗	39		
14	華嚴滝	大缶	1	紀行風俗	151		
15	木曾川	大缶	1	紀行風俗	153		
16	室戸岬	大缶	1	紀行風俗	155		
17	京都別府	大缶	1	紀行風俗	157		
18	夏の雲仙	大缶	1	紀行風俗	159		
19	十和田湖	大缶	1	紀行風俗	161		
20	上高地溪谷	大缶	1	紀行風俗	163		
21	勝狩峠	大缶	1	紀行風俗	165		
22	ベドウィン人	小缶	1	紀行風俗	187		
23	ナイヤガラ瀑布	小缶	1	紀行風俗	191	25	有
24	ベルサイユ宮殿の大噴水	小缶	1	紀行風俗	207	49	有
25	アテネの衛城	小缶	1	紀行風俗	213		
26	鉛筆の製造法	小缶	1	農業、工業、水産	181		
27	貝の養殖	小缶	1	自然科学	181		
28	フマリツピンの椰子	小缶	1	自然科学	217		
29	甲虫	小缶	1	自然科学	183	59	有
30	木の葉虫	小缶	1	自然科学	185	52	有
31	鳥の飛行	小缶	1	自然科学	193		
32	黄金虫	小缶	1	自然科学	195	1041	有
33	植物の発生	小缶	1	自然科学	197		
34	蛇類	小缶	1	自然科学	203		
35	モナコの水族館	小缶	1	自然科学	209		
36	顕微鏡下の植物	小缶	1	自然科学	211		
37	百合の花	小缶	1	自然科学	223		
38	幼虫の成育	小缶	1	自然科学	225	58	有
39	あぶの孵化	小缶	1	自然科学	227	81	有
40	蛙	小缶	1	自然科学	229	1002	有
41	蛸	小缶	1	自然科学	231	1019	有
42	蝸牛	小缶	1	自然科学	233	1065	有
43	蜜蜂	小缶	1	自然科学	235	1075	有
44	アミーバ	小缶	1	自然科学	237		
45	トカゲ	小缶	1	自然科学	241	1081	有
46	蝙蝠	小缶	1	自然科学	243	1056	有
47	液体空気	小缶	1	通俗科学	189	74	有
48	蒸気機関	大缶	1	通俗科学	199		
49	顕微鏡下の水の一滴	小缶	1	通俗科学	201	26	有
50	壇中の卵	小缶	1	通俗科学	215	27	有
51	血液	小缶	1	通俗科学	239		
52	蠅の話	小缶	1	通俗科学	245		
53	国際水泳大会	小缶	1	運動及び体育	142		
54	印度支那に於ける水牛狩	小缶	1	運動及び体育	247	90	有
55	スイスのスキー競技会	小缶	1	運動及び体育	249		
56	スペインのアルルに於ける闘牛	小缶	1	運動及び体育	251		
57	訪日のツエ伯号	大缶	1	時事	205		
58	東京震災後の状況	不明	不明	時事	253		有
59	正ちゃんの冒険	大缶	2	童話	4		有
60	舌切雀	大缶	2	童話	9		有
61	花咲翁	大缶	2	童話	21		
62	猿蟹合戦	大缶	2	童話	40		有
63	蛸の骨	大缶	2	童話	72		有
64	孫悟空物語	大缶	2	童話	115		有
65	珍説吉田御殿	大缶	2	童話	117		有
66	桃太郎	大缶	2	童話	130		有
67	カチカチ山	大缶	2	童話	144		

このなかで「幼虫の育成」や「液体空気」など理科教材として最適な「自然科学」や海外の「紀行風俗」はほぼフランス製の翻訳版であり、『日本新八景』(No.14~21)をはじめとした国内の「紀行風俗」は社会教材向けに伴野商店が自ら製作したものである。また「童話」に分類されたアニメーション映画には、アメリカのパテ・エクスチェンジ社と撮影契約を結んで「パテー・ニュースの日本班」としても活躍していた横浜シネマ商会によるもの(村田安司作画『花咲爺』『蛸の骨』など)や全日本パテーシネ協会の顧問もつとめた大藤信郎作画の『孫悟空物語』『珍説吉田御殿』(千代紙映画社)があるのが特徴である⁴⁹⁾。また「童話」とともに「自然科学」ものが家庭向けにも販売されており、伴野商店がフランス本国と同様の家庭教育的側面も意識していたことがわかる。また大毎と提携して、大毎キネマ・ニュースの9ミリ半縮尺版も販売した⁵⁰⁾。

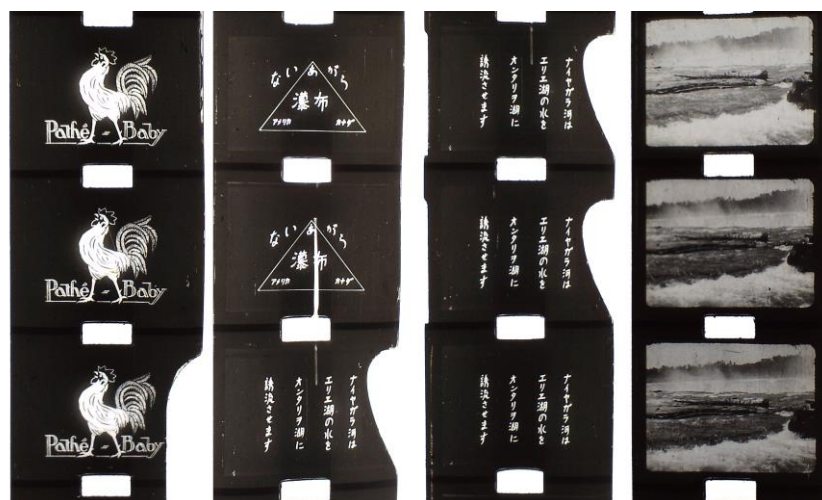


図3 『ナイアガラ瀑布』(No.23)のフィルム冒頭(「松本夏樹コレクション」より)



図4 『花咲爺』(No.61)のフィルム冒頭(「松本夏樹コレクション」より)

その一方で、当初パテ・ベビー映写機はコダスコープなどの16ミリ映写機に比べて光源

が弱く(専用の豆電球1本)、教室以上の大きさでの上映には不向きであったため、伴野商店側としては通常講堂などで全校生徒を集めて行われる従来の「情操映画」を批判することで、教室用の「動く掛図」としての「教材映画」に新規顧客を引き付けたい狙いもあった。当時都市部以外では夜間しか学校に配電されない場合も多かったため、光源に電灯線を必要とする16ミリであれば夜間に電灯設備完備の講堂等でしか上映できないが、パテ・ベビーなら蓄電池を使って日中でも教室で上映可能であることも惹句として強調した⁵¹⁾。なかでもパテ・ベビーの一番の売りは、16ミリ映画に比べると価格が半額ほどで済むことであった。それゆえ、「アマチュア映画」に定評のある伴野商店は、小学校教員自ら授業用の教材映画を製作することを積極的に推進したが、当初その反応は薄かった。その理由のひとつとして、全日本活映教育会や大阪府下の小学校、パテ・ベビー愛好家などを交えた会合で挙げた意見としては、当時の小学校の先生が「余りに多忙すぎる。映画製作に没頭される時間が少なすぎ」というものであった⁵²⁾。そのため、その問題を補うために、余暇と小型映画製作のノウハウを持ったアマチュアが現場の教育者から題材を提供してもらって教材映画を製作するという方法も提案された。また1929(昭和4)年9月から東京ベビーシネマ倶楽部で小学校教科書に基づく教材映画を募集しはじめ、優秀映画は東京の時事新報社の大講堂で発表上映して広報につとめたが、16ミリ映画の学校への圧倒的普及率には遠く及んでいなかった⁵³⁾。一方で1930(昭和5)年7月になると、大毎自ら「内外の十六ミリフィルムを豊富に購入」して「大毎十六ミリフィルム・ライブラリー」を新設して貸出を開始することを決めた⁵⁴⁾。焦った伴野商店は、同月パテ・ベビーの月賦販売を開始し、一般には保証人を必要とするところを、学校の場合は学校長名義で申し込めばその必要はなく、「最初の送金のみで直ちに送品」するサービスをはじめた⁵⁵⁾。さらに劣勢をなんとか挽回すべく、8月には全日本活映教育会協力の下で夏期講習を開催し、「教材映画を自ら製作するに適するや否や」を明らかにする実験と称して、新たな教育関係者の需要を獲得するために、「モートカメラの御貸渡」「御撮影用生フィルムの無代提供」「撮影後早速無料現像の上送呈」をおこない、愛知、三重、大阪を巡回したが、その結果は従来のパテ・ベビー愛好家が集まったにすぎなかった⁵⁶⁾。そのため、当初からパテ・ベビーを「家庭用以外では使用せられない」と考えていた大阪学校映画協会主事の交野宗一は、パテ・ベビーの流行は今や「往年の写真全盛時代を思はしむる程度」と一蹴し、「経済的關係からパターベビーに行く。更にパターベビーに飽きて十六ミリに進むことはかれらの定経である」としている⁵⁷⁾。

このように伴野商店は、寺田商店の「情操映画」に対して得意分野の「教材映画」で攻めることで、9ミリ半映画として大毎フィルム・ライブラリー学校巡回映画連盟参加校のシェアを獲得しようと様々な営業努力をするものの16ミリ映画普及の勢いにはかなわず、結果的に大毎にも見限られてしまったのである。

VI パテ・ベビー作家の「教育映画」参入推進活動と戦時下の統合の影響

大毎が小型映画として16ミリを選んだことで、学校教育部門への進出に行き詰ったかに見えたパテ・ベビーであったが、一部の学校からは絶対的にパテ・ベビーを推薦する篤い

支持を得ていた。そのなかには当初 16 ミリ映画を採用していたものの、「十六ミリの映画を借用する約束で実地授業をする事になつてゐましたが当日、他校へ貸出され貧弱なライブラリーの醜態を暴露」したのを機にパテ・ベビーに変更した堺市英彰尋常小学校や、全日本活映教育研究会の教材映画調査委員でもあった井村金三郎が校長の奈良県畝傍北小学校などがある⁵⁸⁾。また 1931 年(昭和 6) 年になると、光源が大きくて明るい「パテ・ルックス (Pathé Lux)」(Y 型) 映写機が発売され、それまで一番の懸案であった上映規模の問題は完全に解消された。そのため伴野商店大阪支店は、名誉挽回すべく一時休刊していた『教材映画』冊子を復刊し、学校教育方面の再開発に挑んだ⁵⁹⁾。まずは、初心者的小型映画製作への敷居を下げるために、従来の売りだった自家現像だけでなく、16 ミリのコダックのように現像サービスを開始した⁶⁰⁾。続いて翌 1932 年(昭和 7) 年 2 月には懸賞金付きで教材映画の作品を募集し、その惹句には「教材映画」第四号発刊と共に多大な御声援御鞭撻を得、痛切に映画教育の必要を多感し此の道の進歩発展を祝し微力ながら、教育者の手に依つて製作された生きた教材映画の募集を断行いたしました。応募者は勿論教育者に限り、斯界の権威者の審査に依り可と認めた作品は学校名・製作者名と共に複写の上全国の児童教育にご利用願ふ」とし、一等(1 名)に賞金 100 円、二等(1 名)に賞金 50 円、三等(1 名)に賞金 20 円進呈した⁶¹⁾。4 月には「九ミリ半パターベビーのスクール・ライブラリー」を新設し、貸出期間 2 日 1 晩で、小缶(約 30 呎) 10 銭、大缶(約 60 呎) 20 銭、倍大缶(約 120 呎) 40 銭、特大缶(約 240 呎) 80 銭で貸し出し、大毎の 16 ミリフィルム貸し出しのような「フィルム配給難の不便」は絶対にならないこと、「新しいフィルム・安い料金」で貸し出すこの制度は「パターベビー映写機御使用校のみ味ひ得る犠牲的奉仕」であることを謳った⁶²⁾。同年の大毎フィルム・ライブラリーの 16 ミリ映画貸し出し料金をみると、1 日につき 200 呎まで 80 銭、400 呎まで 1 円 50 銭で、別途年会費が毎月 1 回実施で 72~96 円、隔月 1 回実施で 36~48 円となっている⁶³⁾。つまり、これと比べるとパテ・ベビーは、年会費がかからない上に呎単位でさらに廉価な設定になっており、伴野商店の企業努力がうかがえる。

また、日本の傀儡国家たる満州国が誕生し、五・一五事件によって政党政治が失墜して挙国一致内閣が誕生した 1932(昭和 7) 年には、アマチュア映画作家は世間から「富裕層の道楽」とみなされるアヴァンギャルドな芸術映画製作よりも、「社会的に存在を明かに」した「素晴らしい文化映画」製作に貢献すべきであるという機運が次第に高まってくる⁶⁴⁾。この頃から頻繁に用いられ始めた「文化映画」という概念は、それまでの「教育映画」とほぼ同義であるものの、「国民の文化的向上に貢献する」ためのドキュメンタリーとしてのニュアンスが前面に押し出されるようになった⁶⁵⁾。それでも当初は「文化映画」という大義名分さえあれば、既成映画であっても「旅行の記録に一寸した説明をさし挟んだもの、つまらぬ寸劇風のものを織り込んで宣伝映画の毛の生へた様なもの等、無理押しに押し付けた」ものが 35 ミリ、16 ミリ映画を中心に多数存在していた⁶⁶⁾。そのため、既成映画では物足りないパテ・ベビー支持の学校関係者は、国際的なコンクールで評価されてきたような技術力と芸術性と潤沢な資金を兼ね備えた「比較的ブルジョア階級が多」いパテ・ベビー映画作家こそ「製作費と云う事で利益を度外視し、凡ゆる職業的環境を利用し得る事等が営利会社の作る文化映画よりもより芸術的、良心的に冷静に製作出来る」のだから、教

育者に協力して「教材映画」を製作してほしいと呼びかけたが、それを実際に実行へ移すのはまだごく一部のみにすぎなかった⁶⁷⁾。

しかし1937(昭和12)年、盧溝橋事件をきっかけに日中戦争に突入して「国民精神総動員」運動が活発化すると、パテ・ベビー映画作家も一気に「教材映画」を含む「文化映画」製作に進出しはじめる。その代表格が1930年代前半まで前衛的な作品を多数製作してアマチュア映画界で国際的な評価を受けてきた荻野茂二らである⁶⁸⁾。伴野商店発行の雑誌『パテーシネ』誌上においても、これまでの既成映画は「我が国の「文化映画」は新聞社や興行映画製作会社の副業として又その社の名誉と宣伝のために行はれ、「教材映画」は小規模の企業として所詮は金もうけの爲めに行はれて居る」と糾弾され、「富裕層の道楽」から脱して「国民の文化的向上に貢献する」ことこそ「シネ・アマチュアの社会的文化的役割—開拓者及前衛としての使命—」であると声高に叫ばれはじめた⁶⁹⁾。それでも同年、北支事変特別税(物品特別税)で映写機やフィルム(生フィルム)を含む奢侈品が20%課税されると、伴野商店は商品の値上げに踏み切らざるを得なくなり、パテ・ベビー愛好家の購買力や製作意欲も一気に低下した。さらに追い打ちをかけるように、戦争に無関係の物資に対し貿易統制をおこなう輸出入品等臨時措置法(1937[昭和12]年9月10日公布)に関連して翌年には鋼製品製造制限規則が施行され、国内の幻燈機・活動写真機製造も禁止となり、パテ・ベビー製品を用いたアマチュアによる教材映画への参画は立ち行かなくなった。また1936(昭和11)年に文化統制のひとつとして行われた小型映画の統合を契機に、9ミリ半映画パテ・ベビーに特化してきた伴野商店の小型映画事業そのものも次第に苦しくなってくる。そして1939(昭和14)年には小型映画雑誌の戦時統合によって、自社の主力雑誌『パテーシネ』を廃刊せざるを得ない状況に追い込まれ、伴野のパテ・ベビー産業は歴史の表舞台から姿を消した⁷⁰⁾。

一方、国家や公共団体の国策映画に大きくシフトしていた大毎と16ミリ映画産業は、戦時下においてもその事業を継続することができた⁷¹⁾。特に大毎の学校巡回映画連盟は、1942(昭和17)年の時点で2000もの小学校を傘下におさめて「民間における唯一の全国的組織体」として「我が国の学校映画教育を今日にまで至らしめた最大の推進力」となっていた⁷²⁾。また1943(昭和18)年になると、文部省管轄の映画教育中央会(1937[昭和12]年創立)と合併して「大日本映画教育会」となり、これが戦後改組されて戦後の視聴覚教育を先導した「日本学校映画教育連盟(学映連)」(1960[昭和35]年に「日本学校視聴覚教育連盟(学視連)」と改名し、現在に至る)に受け継がれていくことになる。

また寺田商店は、1941(昭和16)年の物資動員計画によって政府情報局が「民間に廻す映画フィルムは今後一呎もない」と発表したことで生フィルムが入手困難となり、同年8月に深田商会など同業4社で中央映画製作株式会社を設立、1943(昭和18)年7月には朝日新聞社を母体とする朝日映画社に吸収合併された⁷³⁾。朝日映画社は、戦後には新世界映画社と名前を変え、寺田清彦は同社の第三製作次長に就任する。新世界映画社は学映連を中心に全国各地で起きていた「映画教室運動」に対応するように自社の子供向けアニメーション作品を組み合わせた「映画教室番組」を編成し、全国の映画館で上映した⁷⁴⁾。つまり、戦前に伴野商店が先鞭をつけた教室向けの「教材映画」というテーマが、戦後にかつての寺田商店を含む新世界映画社で、劇場公開用のトーキー映画に転用されたのである。そし

て寺田が製作にかかわったアニメーション映画『欲ばり狐』(1947年)は、1953(昭和28)年にNHKでテレビ放映もなされた⁷⁵⁾。しかし、その新世界映画社も「ひところは猛烈なダンピングで配給館一二〇〇を数えたが、人件費と短篇部門の不振が祟って、ついに三〇〇万円の負債を生じ、一九四九(昭和二四)年の一月を以て破産」し、世間では「ヒロポンと共産党とダンピングが新世界映画社をつぶした」といわれたという⁷⁶⁾。

このように戦時体制を機に、産業として完全に姿を消してしまった9ミリ半映画パテ・ベビーに対して、浪華の花街文化に育った寺田商店が仕切った16ミリ映画は戦後も学校教育あるいはテレビで活用され、それはアマチュア向けには8ミリ映画が台頭してきた1960年代以降も連綿と続いていくのである。

VII おわりに

以上本稿では、戦前的大阪毎日新聞社の映画事業の本流であった寺田清四郎商店と、アマチュア映画から教育映画へと進出してきた傍流である伴野文三郎商店の商戦とその変遷を論じた。寺田商店は、明治中期から大阪の花街の中心で古典的な幻燈芝居「錦影絵」や最新の西洋幻燈を用いた通俗教育ものまで取り扱い、明治末から早々に大毎の活動写真班に協力して「広告映画」(35ミリ映画)の製作をおこない、大毎が学校巡回映画連盟を組織してからは情操教育ものを中心にした「教育映画」(35ミリ、16ミリ映画)を多数製作、戦時下では朝日映画社と合併してアニメーションを中心とした国策「文化映画」を生み出し、戦後には新世界映画社となって、初期のテレビの教育アニメーションにも貢献した。一方フランスの高級商品輸入商である伴野商店とその「パテ・ベビー」(9ミリ半映画)は、富裕なアマチュア向けの小型映画として大成功をおさめた後に、大阪支店を中心に「教育映画」事業に乗り出し、学術的な内容が多いフランス製の既成フィルムに日本語タイトルをつけた「教材映画」を売り出したり、前衛的なパテ・ベビー作家との連携を呼び掛けたり、様々なキャンペーンを張って学校巡回映画連盟加盟校のシェアを獲得しようとしたものの、翼賛体制へと突き進む時代の流れを掴み切れず、戦中・戦後まで9ミリ半映画事業を継続することはできなかった。またこの二社を中心とする多くの映像メディア関連企業が寵愛を受けるべく袖を引き合った、大旦那である大阪毎日新聞社とその学校巡回映画連盟は、戦中は完全に国家統制の傘下に入ることによって時代の荒波を乗り切ったのである。こうした明治から戦中までの映像メディア産業界変遷の構図は、現在のテレビ業界をめぐるスポンサーと広告代理店との関係、また放送業界さらにはモバイルとPCによるネット上の動画配信サービス事業と個人映像発信者(Youtuberや「インスタ映え」ファンなど)の関係、その許認可権を握る政官界との関係とも決して無縁ではない。むしろその基本構造、国家や大企業に利権を求めて群がる中小企業という事情は今も昔も何ら変化していないと筆者は考えるが、同時代に生きていてもその構造はより複雑化して見えにくくなっている。だからこそ、映像メディアの今日的問題の史的プロトタイプ研究のひとつとしてこの構図を提示することが本稿の趣旨であった。

(神戸大学国際文化学研究科博士後期課程)

[付記] 本稿はJSPS 科研費 18J10887「混淆する戦前の映像文化(幻燈・玩具映画・小型映画)の受容とその歴史的変遷」の助成を受けた研究の一部である。本稿執筆にあたり、伴野文三郎商店関連の一次史料を中心に貴重な「松本夏樹コレクション」の提供と助言をいただいた松本夏樹先生、寺田清四郎商店に関する貴重な文献史料(「入江正彦コレクション」)の調査と撮影にご協力いただいた兵庫県立歴史博物館主査・学芸員の香川雅信氏に深く感謝申し上げます。

注

- 1) 大阪毎日新聞社の映画事業に言及している先行研究には、大澤浄「映画教育運動成立史—年少観客の出現とその囲い込み」(『映画学的想像力——シネマ・スタディーズの冒険』、人文書院、2006年)や赤上裕幸「「ポスト活字」社会の黙示録—『映画教育』『活映』復刻にあたって」(『映画教育／活映 復刻版 第一期』、柏書房、2014年)、津堅信之『日本初のアニメーション作家 北山清太郎』(臨川書店、2007年)などがある。
- 2) パテ・ベビーに関する近年のアマチュア映画研究としては、那田尚史「連載 日本個人映画の歴史(一〜八)」(Fs編集部『映像実験史 Fs』第1〜8号、1992〜2002年)や西村智弘「アマチュア映画のアヴァンギャルド」(『映画は世界を記録する——ドキュメンタリー再考(日本映画史叢書5)』、森話社、2006年)、水島久光「偏在する残像 パテ・ベビーが映し出す〈小さな歴史〉研究「序説」」(『大正イマジユリィ』8号、2012年)、後藤一樹「〈趣味〉と〈闘争〉—1920 - 30年代のアマチュア映画の公共性—」(『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会心理学教育学：人間と社会の探究』No. 78、2014年)、飯田定信「パテ・ベビーの時代」、森末典子「アメリカにおける9.5ミリ規格の普及と使用」(『おもちゃ映画ミュージアム』3号、2017年)など。
- 3) 篠崎昌美『大阪文化の夜明け』、朝日新聞社、1961年、62頁。
- 4) 『大阪商工大観』、株式会社夕刊大阪新聞社、1929年、258〜259頁。
- 5) 篠崎昌美、前掲書、62〜63頁。
- 6) 詳細は拙論「明治期における「通俗教育」として混在するメディア」(『映像学』第98号、日本映像学会、2017年)を参照されたい。
- 7) 菅楯彦(1873〜1963)の妻は、日露戦争時の絵葉書ブロマイドで有名な大阪南地の名妓「富田屋の八千代」(遠藤美紀子)である。
- 8) 篠崎昌美、前掲書、64頁。
- 9) ただし、実物史料を見る限り日露戦争時は主に軍人の肖像写真であり、戦闘シーンが写真化するのは第一次世界大戦以降である。
- 10) 1872(明治5)年10月、松島遊郭、南地五番街、堀江遊郭、曾根崎遊郭、新堀遊郭とともに大阪府に遊所の許可地とされた新町遊郭は、江戸期には大坂唯一の公許とされた老舗の遊郭で、町域は新町北通1〜2丁目、新町通1〜2丁目、新町南通1〜2丁目、裏新町である(本渡章『大阪古地図むかし案内 明治〜昭和初期編』、創元社、2011年、44〜45頁)。
- 11) 同書、48頁。
- 12) 松本夏樹「新発見の江戸期の木製幻燈に関する考察—「写し絵・錦影絵」との比較を中

心に一」、『演劇研究』第35号、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、2012年、94～97頁。

13) 「幻燈器械 幻燈映画 目録」、寺田清四郎本店、発行年不明、17～18頁(兵庫県立歴史博物館所蔵「入江正彦コレクション」より)。

14) 前掲拙論で詳細に取り上げた東京浅草の鶴淵幻燈舗と比較すると、鶴淵は1909(明治42)年の時点で尺30銭で販売しており、寺田商店の方が尺2銭廉価で販売されていることがわかる(『幻燈 第二十六号』、鶴淵幻燈舗、1909年、11～14頁)。

15) 当時はエリートの銀行員であっても初任給35円程度であり、兼用機1台購入するにはその月俸の1ヶ月半～半年分ほどが必要であった(週刊朝日編『値段史年表 明治・大正・昭和』、朝日新聞社、1988年)。

16) 「活動やの打明話(四六)」、『読売新聞』1927年12月30日朝刊、10頁。また映像文化史家の松本夏樹が半世紀に亘り蒐集してきた幻燈・映画フィルム・映像機器関連の「松本夏樹コレクション」には、150尺程度に編集された『玉の肌』というタイトルのある庇髪の遊女相手のポルノ実写フィルム(35ミリ)も現存しており、男性客を集めてのお座敷活動などで上映されたものと思われる。

17) 寺田商店は当時、自社工場を3ヶ所持っており、そのうち2ヶ所(新町南通4丁目、阿波座下通一丁目)は「器械部」であった(もう1ヶ所は「楽器部」)。この自社工場でどこまで製作されたのかは不明だが、当時の大型映写機はブリキのみで作る玩具映写機と違い、ブリキ、真鍮、鉄などの様々な金属を用いて鋳造・鍛造・圧延・切削・メッキなど近代産業技術を集結してはじめて製作可能な製品であった。

18) 水野新幸『大阪毎日新聞活動写真史』、大阪毎日新聞社、1925年、26頁。特に地方巡回の際には「班員又三名或は四名にてその各自の鞆もあり、その輸送は一仕事であり、運賃も存外馬鹿にならなかつた」という(同書34～35頁)。

19) 映写機の変更によって、かつては一班につき3～4人必要だったのが、技術者と説明者の2名で済むようになり、臨時数十班を編成して全国津々浦々まで巡回することが容易になったという(水野新幸前掲書33、37頁)。

20) 「浜寺公園」、ホームページ『大阪府営公園デジタルアーカイブス』、一般財団法人大阪府公園協会、URL: www.osaka-park.or.jp/archives/archives.php?p=14&g=0(最終閲覧日: 2019年2月13日)

21) 水野新幸、前掲書、22～25頁。

22) 同書、41頁。

23) 「活動写真機械 活動写真フィルム 其他付属品一式定価表」、寺田清四郎商店、発行年不明、3頁(兵庫県立歴史博物館所蔵「入江正彦コレクション」より)。

24) 水野新幸、前掲書、41頁。

25) 同書、40頁。田中純一郎『日本教育映画発達史』、蝸牛社、1979年、67～68頁。

26) 水野新幸、前掲書、41頁。

27) 同書、25頁。

28) その後も大毎との関係は継続しており、1925(大正14)年に大毎が新聞発行1万5千部達成記念として開催した「大大阪記念博覧会」では、寺田商店の活動写真機が当展覧会

の陳列意匠審査委員会の「優秀意匠の推奨」に選出されている(『大大阪記念博覧会誌』、大阪毎日新聞社、1925年、538～539頁)。

29) 水野新幸、前掲書、27頁。

30) 同書、42頁。

31) 「来月の学校映画」第7号、奥商会教育映画部、1934年5月(筆者蔵)。

32) 同上。

33) 初期映画研究の第一人者である田中純一郎(1902～1989)は、水野新幸について「海坊主のような風貌をした一種の狂信的ナショナリスト」と評している(田中純一郎、前掲書、59頁)。

34) 「活映教育パンフレット第1集 活映教育の現状」、全日本活映教育研究会、1931年、12頁(筆者蔵)。

35) 『映画教育』第3集、1928年5月号、巻末頁。

36) 「活映教育の現状」、前掲書、巻末頁。

37) 「フィルム燃焼実験」、『映画教育』第40集、1931年6月号、38頁。「フィルム燃焼実験」、寺田清本店、発行年不明(筆者蔵)。

38) 関野嘉雄『映画教育の理論』、小学館、1942年、46頁。

39) 現在この映画は16ミリ版で広島市映像文化ライブラリーに所蔵されており、東京国立近代美術館フィルムセンター(現・国立映画アーカイブ)の「発掘された映画たち2005」で上映された。

40) 『映画教育』第37集、1931年3月号、巻末頁。

41) 「十六ミリを情操映画本位で」、『映画教育』第31集、1930年9月号、21頁。

42) 「活映教育の現状」、前掲書、巻末頁。「ノビリー16mm映写機」チラシ、寺田清本店、1931年(筆者蔵)。

43) 「東京だより」、『映画教育』第35集、1931年1月号、37頁。

44) 深田商会は「ホーム・ムービー・ライブラリー」を開設して一般家庭向けに貸出業務を始め、伴野商店のパテ・ベビーと家庭向けシェアを競ったが、その点については拙論「小型映画の混淆的文化から統制へ—大正から昭和の関西圏を中心とする9ミリ半と16ミリ映画産業—」(『次世代人文社会研究』第15号、日韓次世代学術フォーラム、2019年3月)で詳述している。

45) 「パテ・ベビーが教育ものを」、『映画教育』第3集、1928年5月号、28頁。

46) 当時の学校授業における「動く掛図」としての映画の活用については、田村謙典「美学的な映画・複製技術としての映画——1930年代の映画教育論争＝「動く掛図」論争をめぐる」(『マス・コミュニケーション研究』第70号、日本マス・コミュニケーション学会、2007年、214～232頁)に詳しい。

47) 大伴喜祐「小学校の映画教育とパターベビー」、『映画教育』第15集、1929年5月号、19頁。

48) 『教材映画としてのパターベビー(九ミリ半活動写真機)』、伴野商店大阪支店内教育映画研究部、1929年10月(筆者蔵)。家庭向け販売に関しては、静岡県浜松市の中村写真機

店で配布された「パターベビー映画目録」(伴野文三郎商店、1929年9月、「松本夏樹コレクション」より)を参照した。また1934年の『パターシネ』(第7年4月号)には「パター九ミリ半 教材映画目録」として160作品掲載されている(110～111頁)。

49) 田中純一郎、前掲書、54、78頁。伴野製『花咲爺』と『蛸の骨』は「松本夏樹コレクション」に実物フィルムが現存しており、本作が村田安司作画であることを特定した。

50) 「家庭へキネマ・ニュース」、『映画教育』第23集、1930年1月、3頁。

51) 大伴喜祐「小学校の映画教育とパター・ベビー 映写機の光源に蓄電池を応用する法」、『映画教育』第16集、1929年6月、18頁。日中の電灯線を引いている学校は1937年頃になっても地方ほど少なく、電灯線を利用したラジオ受信設備を設けている小学校(近畿、中国、四国地方で1827校)においても、例えば鳥取県では約34%、香川県では約61%が日中に電灯線を利用できず、大阪府の約4%と比べて大きな開きがある(日本放送協会大阪中央放送局編「学校ラジオ受信設備調査報告」、日本放送協会大阪中央放送局、1937年、18頁)。

52) 竹内吉之助「アマチュアと教育者の握手」、『パターキネマ』第4年10月号、全関西パターキネマ連盟、1933年、15～17頁。

53) 大伴喜祐「小学校の映画教育とパター・ベビー(7)」、『映画教育』第25集、1930年3月、26頁。

54) 「活映教育の現状」、前掲書、10頁。

55) 「パターベビー月賦販売開始」、『映画教育』第29集、1930年7月、32頁。

56) 『映画教育』第30集、1930年8月、巻末頁。

57) 交野宗一「十六ミリ・フィルム研究」、『映画教育』第1集、1928年3月、14頁。「十六ミリ最近の進出とその将来」、同書第34集、1930年12月、24頁。

58) 堺市英彰尋常小学校「パター9ミリ半映画教育研究発表」、『パターキネマ』第3年12月号、1932年、20頁。奈良県畝傍北小学校「パターベビーで映画学習の研究」、『映画教育』第33集、1930年11月、24頁。

59) 「9ミリ半フィルム 教材映画」第4号、伴野商店研究部(大橋善次郎)、1931年12月(筆者蔵)。

60) 「パター・ベビー現像缶制度 大阪伴野商店の新考案」、『映画教育』第39集、1931年5月号、19頁。

61) 『映画教育』第48集、1932年2月号、巻末頁。当時の小学校教員の初任給(月俸)は45～50円程度なので、一等賞金はその月俸の2か月分にも上る(週刊朝日編、前掲書、92頁)。

62) 『映画教育』第51集、1932年5月、4頁。第53集、1932年7月、36頁。第54集、1932年8月、44頁。当時の映画館入場料は40～50銭程度である(週刊朝日編、前掲書、13頁)。

63) 水野新幸編「大毎フィルムライブラリー目録」、大阪毎日新聞社活動写真班、1932年、巻頭頁。

64) 竹内吉之助、前掲書。

- 65) 関野嘉雄、前掲書、32頁。
- 66) 田中義一「アマチュア映画と文化映画」、『パテーシネ』第10年6月号、全日本パテーシネ協会、1937年、52～53頁。
- 67) 同上。堺市英彰尋常小学校は、アマチュアとの提携について3つの方法（「懸賞募集による方法」「アマチュアに依頼する」「教育者とアマチュアの共同製作」）を挙げて協力を呼び掛けている（「パテー九ミリ半映画教育研究発表」、『パテーキネマ』、第3年12月号、1932年、17～20頁）。
- 68) 荻野の文化映画進出と戦時下のアマチュア映画作家の報国活動については、板倉史明「戦時下におけるアマチュア映画文化」（『動員のメディアミックス（創作する大衆）の戦時下・戦後』、思文閣出版、2017年、pp.195-210.）に詳しい。
- 69) 三宅朗「郷土映画」に関する二三の問題（上）、『パテーシネ』第10年3月号、1937年、36～40頁。
- 70) 小型映画作家とその協会はそのサイズを問わず「日本小型映画作家連盟」（1936年12月）、「日本アマチュア文化映画協会」（1937年5月）として統合することとなる。
- 71) 『鋼製品製造制限規則』（1938年8月15日施行）では、「府県の試験研究機関の機械、試験研究のため製造する機械、国家若しくは公共団体等から奨励金、補助金の交付を受けて製造するもの」、「機械の修繕」、「機械の付属品」（消耗品）の製造は除外された（商工行政調査会編『経済警察必携』、新光閣、1938年、94～103頁）。
- 72) 関野嘉雄、前掲書、38頁。
- 73) 田中純一郎前掲書、141～154頁。1943年に中央映画製作株式会社とともに合併した芸術映画社は、アニメーション作家の瀬尾光世や持永只仁などが所属しており、統合下で製作された国策映画『桃太郎の海鷲』（1943年、瀬尾光世）は日本初の長編アニメーション映画であるとされる。
- 74) 田中純一郎、前掲書、185～186頁。
- 75) 古田尚樹「テレビジョン放送における「映画」の変遷」、『成城文藝』第196号、成城大学文芸学部、2006年、213～266頁。
- 76) 田中純一郎、前掲書、185～186頁。

参考文献

- 赤上裕幸「「ポスト活字」社会の黙示録—『映画教育』『活映』復刻にあたって」、『映画教育／活映 復刻版 第一期』、柏書房、2014年
- 飯田定信「パテ・ベビーの時代」、『おもちゃ映画ミュージアム』3号、一般社団法人京都映画芸術文化研究所、2017年
- 板倉史明「戦時下におけるアマチュア映画文化」、『動員のメディアミックス（創作する大衆）の戦時下・戦後』、思文閣出版、2017年
- 『映画教育』第1、3、15、16、23、29～31、33～35、37、39～40、48、51、53～54集、全日本活映教育研究会、1928年3、5～6月、1929年5月、1930年1、7～9、11～12月、1931年1、3、5～6月、1932年2、5、7～8月

-
- 大澤浄「映画教育運動成立史—年少観客の出現とその囲い込み」、『映画学的想像力——シネマ・スタディーズの冒険』、人文書院、2006 年
- 『大阪商工大観』、株式会社夕刊大阪新聞社、1929 年
- 『活映教育パンフレット第 1 集 活映教育の現状』、全日本活映教育研究会、1931 年
- 「活動写真機械 活動写真フィルム 其他付属品一式定価表」、寺田清四郎商店、発行所・発行年不明
- 『教材映画としてのパテーベビー（九ミリ半活動写真機）』、伴野商店大阪支店内教育映画研究部、1929 年 10 月
- 「9 ミリ半フィルム 教材映画」第 4 号、伴野商店研究部（大橋善次郎）、1931 年 12 月
- 『幻燈 第二十六号』、鶴淵幻燈舗、1909 年
- 「幻燈器械 幻燈映画 目録」、寺田清四郎本店、発行年不明
- 後藤一樹「〈趣味〉と〈闘争〉—1920 - 30 年代のアマチュア映画の公共性—」、『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会心理学教育学：人間と社会の探究』No. 78、2014 年
- 篠崎昌美『大阪文化の夜明け』、朝日新聞社、1961 年
- 週刊朝日編『値段史年表 明治・大正・昭和』、朝日新聞社、1988 年
- 商工行政調査会編『経済警察必携』、新光閣、1938 年
- 関野嘉雄『映画教育の理論』、小学館、1942 年
- 田中純一郎『日本教育映画発達史』、蝸牛社、1979 年
- 田村謙典「美学的な映画・複製技術としての映画——1930 年代の映画教育論争＝「動く掛図」論争をめぐる」、『マス・コミュニケーション研究』第 70 号、日本マス・コミュニケーション学会、2007 年
- 津堅信之『日本初のアニメーション作家 北山清太郎』、臨川書店、2007 年
- 那田尚史「連載 日本個人映画の歴史（一～八）」（Fs 編集部『映像実験史 Fs』第 1～8 号、1992～2002 年
- 西村智弘「アマチュア映画のアヴァンギャルド」（『映画は世界を記録する——ドキュメンタリー再考（日本映画史叢書 5）』、2006 年
- 『パテーキネマ』第 3 年 12 月号、第 4 年 10 月号、全関西パテーキネマ連盟、1932～1933 年
- 『パテーシネ』第 7 年 4 月号、第 10 年 3、6 月号、全日本パテーシネ協会、1934、1937 年
- 「フィルム燃焼実験」、寺田清本店、発行年不明
- 福島可奈子「明治期における「通俗教育」として混在するメディア」、『映像学』第 98 号、日本映像学会、2017 年
- 福島可奈子「小型映画の混淆的文化から統制へ—大正から昭和の関西圏を中心とする 9 ミリ半と 16 ミリ映画産業—」、『次世代人文社会研究』第 15 号、日韓次世代学術フォーラム、2019 年
- 古田尚樹「テレビジョン放送における「映画」の変遷」、『成城文藝』第 196 号、成城大学

文芸学部、2006 年

本渡章『大阪古地図むかし案内 明治～昭和初期編』、創元社、2011 年

松本夏樹「新発見の江戸期の木製幻燈に関する考察—「写し絵・錦影絵」との比較を中心に—」、『演劇研究』第 35 号、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、2012 年

水島久光「偏在する残像 パテ・ベビーが映し出す〈小さな歴史〉研究「序説」」、『大正イマジュリィ』8 号、2012 年

水野新幸『大阪毎日新聞活動写真史』、大阪毎日新聞社、1925 年

水野新幸編「大毎フィルムライブラリー目録」、大阪毎日新聞社活動写真班、1932 年

森末典子「アメリカにおける 9.5 ミリ規格の普及と使用」、『おもちゃ映画ミュージアム』3 号、一般社団法人京都映画芸術文化研究所、2017 年

——『読売新聞』1927 年 12 月 30 日朝刊

——「来月の学校映画」第 7 号、奥商会教育映画部、1934 年 5 月